

■黒川春村 国学者、狂歌師。考証的な江戸派国学を代表し。膨大な著作。養子黒川真頼は帝大教授に。

くろかわはるむら

蝦夷地直轄始1799＝ 江戸浅草田原町の陶器商の子として生まれる。祖先は伊勢出身という。

間宮海峡発見1808＝ 9歳：

子供の頃から学問を好み、

杉田玄白没・1817＝18歳：

水野忠成老中1818＝19歳：

家業を弟に譲り、本所横網町に住む。

・・・ 1826＝27歳：

初め狂歌に関心を寄せ、2世浅草庵守舎に学び、

富嶽三十六景1831＝32歳：3世浅草庵を襲名して、壺側の総帥として活躍し、

滑稽+人情本 1835＝36歳：

大塩平八郎乱1837＝38歳：

また、和歌にも巧みであったが、

順天堂始・・・1843＝44歳：この頃から、もっぱら国学を志すようになり、交友のあった狩谷掖斎から大きな感化を受け、

天保改革終・1844＝45歳：

阿部正弘首座1845＝46歳：

その学問の方法は本居宣長の学に拠った。最も得意とする分野は音韻学で、宣長の「漢字三音考」を粗略なりとし、「音韻考証」を著わすほどであったが、歴史・文学・絵画・地理などにも詳しく、その考証は確実で定評があった。清水浜臣・岸本由豆流・村田了阿・北静鷹・伴信友・塙忠宝・内藤広前などとも交流し、

孝明天皇・・・1846＝47歳：

*信友死後の嘉永期には、広前とともに、江戸の2人の物識りと称された。
書道にも関心を寄せ、近衛三貌院流を学んだという。名利を好まず、名門貴紳への出入りは好まなかったが、信州高井郡須坂に1万石余を領する大名堀直格とは親しく交際し、直格の学問を助けて、2人俸を給されたこともあった。直格の学問は本格的で、いくつかの著作もあり、とくに「扶桑名画伝」(53巻)は名著として後世に名高い。この本には春村が序文を寄せ、直格からその執筆内容について「もれたらむは補ひそへよ、あまれらむは削りもすてよと、ひたぶるに」依頼されたことを記している。

ペリー来航・1853＝54歳：

春村の著作はおびただしい数にのぼるが、生前に出版されたものは少なく、死後においても、孫の直道が明治32年に、春村の著述を集め、「墨水遺稿」(3冊)に収めた他は、活字となったものはそう多くない。春村には4人の子供がいたが、いずれも他家を嗣いだり、嫁したりしたため、上野国桐生の機業家の子で、門人の金子真頼を養子に迎え、家学を継がせた。真頼はその学問を継承し、のち、東京帝国大学教授として活躍したことはよく知られているところである。

桜田門外変・1860＝61歳：

生麦事件・・・1862＝63歳：

薩長同盟・・・1866＝67歳：没した。

「羽族類課編」「淡海名寄」「音韻考証」「歌道手引草」「三十六番狂歌合」「硯鼠漫筆」「平家物語備考」「名字指南編」「歴代残闕日記編」「風土記逸文」「黒川春村詠草」など多数。